

賀船(高瀬船)で下れるそうで、弘田の日記によれば、渡良瀬川の合流点をへて利根川へ出、翌日関宿に至り、夜船に乗りかえて江戸川を下り、五月二日朝、江戸湾から隅田川をへて鍛冶橋のほとりに着岸し土佐藩上屋敷に到着したという。この河船による患者輸送については今まで報告はなく、新発掘である。③五月八日、弘田玄又は岡本兵衛ら七名の傷病兵をつれて横浜病院に入った。

六、横浜軍陣病院に入院した岡本兵衛は、老女「はま」の介抱を四ヶ月半うけた。彼女の介抱は、心得方宜しく能く仕え候」ということで、岡本死後五日に褒美として金百疋を軍からいただいた。「はま」と岡本は親子の如き年齢差があり、演者の想像では「はま」が明治七年に岡本の遺骨をひきとり、どこかに彼の墓をたてたと思いたい。大聖院の現任職の話では、岡本兵衛、「はま」という方々の話は知らないということであった。

(平成九年十一月例会)

ビタミンの発見に対する漢方医学の貢献

山下政三

ビタミンの発見にたどりつく医学の流れには二つがある。本流は東洋の脚気の研究から進む流れで、支流はヨーロッパの実験栄養学から進む流れである。やがてこの二つが合流す

るのである。

脚気は中国の晋の時代、三世紀、に始まり、次第に全東洋さらには西洋にも広がるが、それに並行して脚気の研究も広く行われるようになる。

日本には、平安時代に隋・唐の脚気医学が導入され、以後いろいろと研究される。

江戸末期から明治初期にかけて、漢方脚気専門医として名高かった遠田澄庵は、脚気について大変な実力をもっていたが、脚気の原因は米食にある、というまったく独創の「脚気米因説」を唱えた。日常の食餌の「米」に着目した、画期的かつ卓越した脚気原因説であった。

京都療病院の教師シヨイベは、来日以来脚気の研究にはげみ、脚気伝染病説を唱えていたが、遠田澄庵の実力を知り高く評価していた。そして遠田澄庵の「脚気米因説」を、自分の伝染病説とはちがうが独自の原因説であると認め、「日本の脚気」というドイツ語の原著論文の中で、それを世界に紹介した。

パタピアの研究所で脚気の原因研究にはげんでいたオランダ医エイクマンは、偶然のことから「ニフトリの脚気」を発見し、原因の究明に努力を傾けた。しかしエイクマンは、シヨイベの脚気論文を研究の手本にしていたため、「脚気の原因は細菌である」という伝染病説にとらわれ、ひたすら細菌さがしに全力をあげた。だが、いかに努力しても脚気の原因菌は見つからず、伝染病説に行きづまった。

この伝染病説に疑問を感じる段階にいたってエイクマンは、遠田澄庵の「脚気米因説」に心を動かされた。研究方針を一八〇度転換し、細菌さがしは中止し、ニワトリの餌の「米」の研究に突進した。

そして遂に、白米がニワトリの脚気の原因であること、米の糠の中に脚気をおさえる未知の有効物質（抗神経炎因子）があること、を発見した。

はじめオランダ語のちドイツ語で発表されたこのエイクマンの報告は、世界的な大反響を呼び、「未知有効物質」の抽出研究がにわかに世界の流行になった。

鈴木梅太郎、フンク、その他、多くの試行錯誤ののち、一九二六年（大正十五年）、バタバアの研究所のヤンセンとドナートによって、ようやく未知有効物質が純粋な結晶として抽出された。「抗脚気ビタミン」（注のちのビタミンB₁）と名づけられ、ここに、人類史上未知であった「ビタミン」がはじめて誕生した。これを契機に、以後さまざまにビタミンが発見され、二十世紀のビタミンの幕が開くのである。

以上、エイクマンが細菌の探求から餌の米の研究に転換した動機は遠田澄庵の「脚気米因説」にあったこと、すなわち、ビタミンの発見につながるエイクマンの研究は、遠田澄庵の米因説によって道を示されたことを述べた。

ビタミン発見の糸口に漢方医学の陰の貢献があったことを、当時の日蘭独の原資料を例示しながら論述した。

（平成九年十二月例金）

齋藤玉男——断種法史上の人びと（その二）——

岡田靖雄

齋藤玉男（一八八〇—一九七二、呉秀三門下、アドルフ・マイヤのもとに留学、日本医科大学教授・東京府立松沢病院副院長をした、ゼームス坂病院開設）は、日本の精神病学があたりらしい方向にうつる導き手の一人となった人であり、また最長寿の長老でもあった。その略伝は、「戦前合州国に留学した精神病学者たち——松原三郎、齋藤玉男、石田昇ほか——」（日本医史学雑誌、第四〇巻第三号、一九九四）にかいてあり、また「灸寺・羽栗病院訪問記」（同誌、第三六巻第四号、一九九〇）でもこの人にふれた。米寿のときの回顧談「八十八年をかえりみて——齋藤玉男先生回顧談——」（大和病院、一九七三）はわたしが集めた。戦前に、精神科医療のあるべき姿をみさだめていた人として、わたしはとくに注目してきた。

精神疾患の遺伝学および断種に関する齋藤の研究・発言は、おおきく四方向にわけられる。血族結婚に関するその第一は、「むらの人々（小さな遺伝生物学的統計）」（脳、第一巻、第一二巻、一九三七、一九三八）で、関東の一農村の二七家系三五九名の記載である。これは出身地群馬県宮城村での自分の見聞によるものであったろう。ここではいとこ婚が一六組みあったが、血縁婚の悪影響はみとめられなかった。